

小中一貫で体育的思考力を育む学び ～ボール運動での教師の関わりについて～

遠藤 勇太・菅原 純也・小野寺 洋平・渡辺 清子*，
佐々木 篤史・熊谷 晴菜**，清水 茂幸・清水 将***

*岩手大学教育学部附属小学校，**岩手大学教育学部附属中学校，***岩手大学教育学部
(令和4年3月14日受理)

1. はじめに

昨年度、器械運動領域での分析を行い次の2点が明らかとなった。

- ①教師の言葉かけにより、児童が考えるための方向付けがなされること
- ②教師の発問により、試行錯誤における体育的表現力の発揮に大きく寄与することがうかがえること

今年度は、ボール運動における教師の関わりについて焦点を当てる。知識及び技能を活用し課題を解決しようとする際の思考力、判断力、表現力等の発揮については、研究の進んでいない部分である。思考力、判断力、表現力等を働かせるための教師の関わりについて器械運動とボール運動を比較する。再現性が高く、系統的指導に適した器械運動(第8集)と再現性が低く、系統性より、瞬間の判断を求められるボール運動の両極端に位置付く領域(岩手大学教育学部附属小学校第31集研究紀要)を比較することにより、体育科・保健体育科における教師の関わりについて、概観することができると考える。

そこで、本研究では本プロジェクトで作成した発問分析表(第7集)を用いながら、児童・生徒の体育的思考力(運動に関わる『問い』をもち、既習・既知の知を活用しながら動きを通して考える力。言葉や文字、動き等で相手に伝えようとする力。論文集第7集で規定)を育む教師の関わりについて明らかにしていくことを目的とする。

2. 方法

岩手大学教育学部附属小学校において、授業実践を行い、その授業を録画録音し、教師の関わりと児童の動きの変容を捉えていく。

その際、昨年度まで継続的に研究を進めている教師の発問分析表に基づいて、教師の発問による関わりと児童の変容を分析し、その有効性を検討するとともに、器械運動とボール運動を比較し、体育科・保健体育科における教師の発問による関わりについての概観を考察する。

また、児童のノート記述から、本時における児童の思考について分析をする。

発問分析表は次のとおりである。(論文集第8集より引用)

- ・運動の根拠を問う(どうしてその運動をしているのですか)
- ・運動の方法を問う(どうしてその方法にしたのですか)
- ・運動への課題を問う(どうしてうまくいかないと考えますか)
- ・運動の良さを問う(その運動の良さは何ですか)
- ・運動の概念を問う(その運動について知っていることは何ですか)
- ・運動の理由を問う(その運動を選んだ理由は何ですか)
- ・自己の成長を問う(どのくらい出来るようになりましたか)

3. 結果と考察

(1) 単元名

ハンドテニス

(2) 単元の目標 (全8h)

- ・基本的なボール操作とボールを操作できる位置に体を移動する動きによって、易しいゲームをすることができる。【知識及び技能】
- ・簡単な作戦を選ぶとともに、考えたことを友達に伝えている。【思考力・判断力・表現力等】
- ・ゲームの規則を守り、仲よくプレイしようとしている。【学びに向かう力、人間性等】

(3) 単元計画

時間	内容
1	オリエンテーション
2	得点を取るためには
3	リーグ戦①
4	ハンドテニスを知ろう
5	得点を取るためには
6	得点を取るためには
7	作戦を考えよう
8	リーグ戦②

(4) 本時の目標 (6/8h)

①本時の目標

ボール操作ができる位置に体を移動することができる (知識・技能)

②教師のフィードバックによる目指す姿

無意識にできた運動を、教師のフィードバックにより、言語化することを通して、動きの自覚化を図り、再現的にプレイしようとする姿。

(5) 教師の行動カテゴリーにおける発言数

指示	59	27%
発問	46	21%
学習指導	10	5%
フィードバック	肯定的	70 32%
	矯正的	22 10%
	否定的	0 0
その他	13	6%
合計	420	100%

(5) 教師の発問数と分類

運動の根拠を問う	24	52%
運動の方法を問う	9	20%
運動への課題を問う	4	9%
運動のよさを問う	2	4%
運動の概念を問う	0	0%
運動の理由を問う	2	4%
自己の成長を問う	1	2%
分類できないもの	4	9%
合計	46	100%

(6) 発問の分類

運動の根拠を問う	<ul style="list-style-type: none"> ・どんな時に得点が入りますか？ ・相手がいないときにやるっていうのは？ ・今のは？ ・あそこになんで打ったの？ ・今何ひそひそ話していたの？ ・今なんでぶっ飛ばしたの？ ・なんであそこ狙ったの？ ・そういうことも考えているの？ ・何をやりすぎたの？ ・今ここに走ってきたのは何で？ ・さっきさ、こっち広かったのにこっちにうったのはなぜ？
運動の方法を問う	<ul style="list-style-type: none"> ・敵がいない方という話が出ていましたが、やってみてどうでしたか？ ・さっき何を教えてたの？ ・今の難しかったけどどうするばよかったの？ ・えっ こっちだけ (左右) じゃないの？ ・どうしたらいいと思う？ ・どうすればよかった？
運動への課題を問う	<ul style="list-style-type: none"> ・今、何があったの？ ・今、何がだめだったの？ ・なんでだと思う？
運動のよ	<ul style="list-style-type: none"> ・どこかいいところあった？

さを問う	・さっきより増えたところありますか？
運動の概念を問う	発言なし
運動の理由を問う	・同じように考えた人いますか？ ・0くん試合中に何してたの？
自己の成長を問う	・なんでガッツポーズだったの？ ・僕はどうやったの？
分類できないもの	・練習が必要ですか？ ・どうする？（怪我をした子へ） ・どう分けられる？（怪我をした児童のチーム急きよのチーム編成） ・仲間からこんなアドバイスももらいましたよ？

(7) 実践の概要

- T 今日は、みんなに得点をとってもらいます。
- T どんな時に得点が入りますか。
- C 相手がいなくてやれば良いです。
- T 相手がいなくてどこですか。
- C 例えば、相手が左に行ったら、右に投げると言うことです。
- T 同じように考えた人はいませんか。
自分が考えたのができるかチャレンジしましょう。

「なぜ、そうしたの」

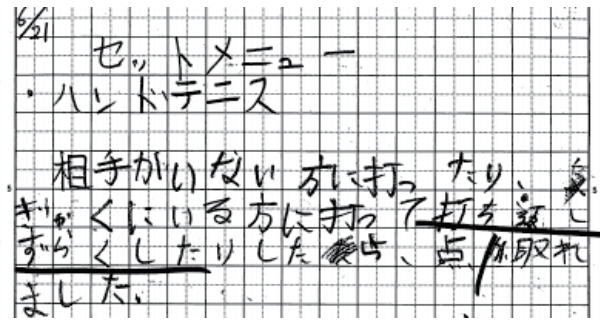
「どうだった」

「今のねらった」

「どうしてうまくいかなかった」

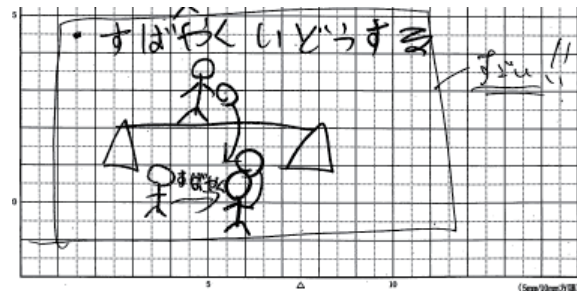
「何が今はよくなかったの」

これらの問いを投げかけることで、プレイの結果だけではなく、そのプロセスにおける考えを明らかにすることができる。本時では、「敵のいないところをねらう」という間口の広い姿を想定していた。こういった問いを繰り返すことにより、反省では次のとおりに発展的に考える姿が見られた。

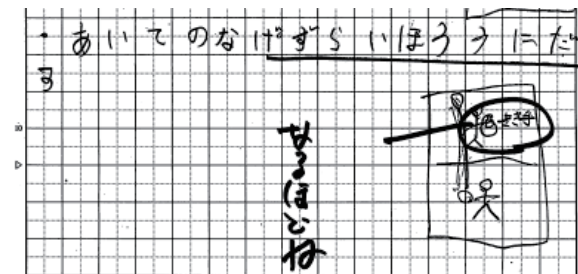


教師が想定した、相手の逆（敵のいないところ）に打つというプレイに関する振り返り。

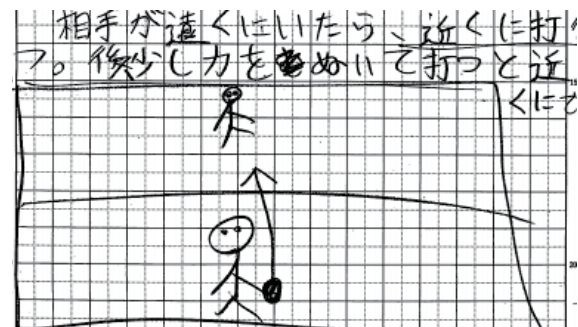
○教師を超えた考え



得点を取るためには、素早くボールに移動し、自分のベストショットをすることで得点が取れることを感じている。



得点を取るためには、相手が打ちづらい方をねらえばよいことを感じている。



このころの子供は、左右のスペースは見るのがやさしいが、前後（特に奥）を見ることは難しい。前後のスペースを感じている。

(8) 器械運動とボールゲームの比較

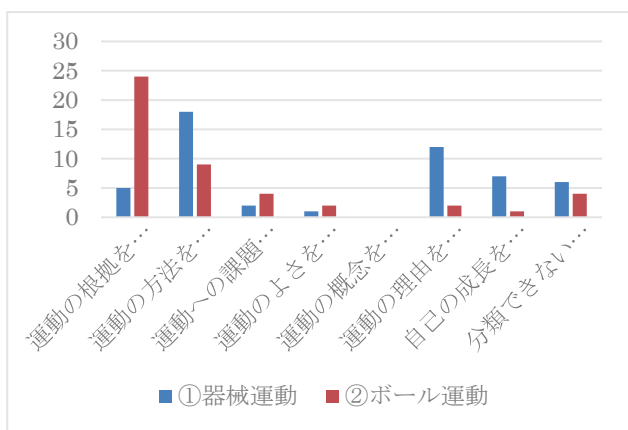
岩手大学教育学部附属小学校では、次のとおり領域の区別を行っている。

「器械運動・陸上運動・水泳などは、個人の動きが課題となる学習領域であり、ゲーム・ボール運動・表現は、集団の動きや空間への移動が課題となる学習領域である。個人の動きが課題となる学習領域では個々の動きについて創発していく学習が、集団の動きや空間への移動が課題となる学習領域では集団での動きについて創発していく学習が展開される。」

個人の動きが課題となる領域の特徴は、その運動そのものが課題となる技能を持っていることである。他方、集団の動きや空間への移動が課題となる運動は、技能を用いながら、集団として達成すべき課題を解決する。技能にスポットを当てるか、技能を働かせながらその外側にある課題を解決しようとするかというところに大きな内容の違いがあると考えられる。

	器械運動の回数	ボール運動の回数
運動の根拠を問う	5	24
運動の方法を問う	18	9
運動への課題を問う	2	4
運動のよさを問う	1	2
運動の概念を問う	0	0
運動の理由を問う	12	2
自己の成長を問う	7	1
分類できないもの	6	4

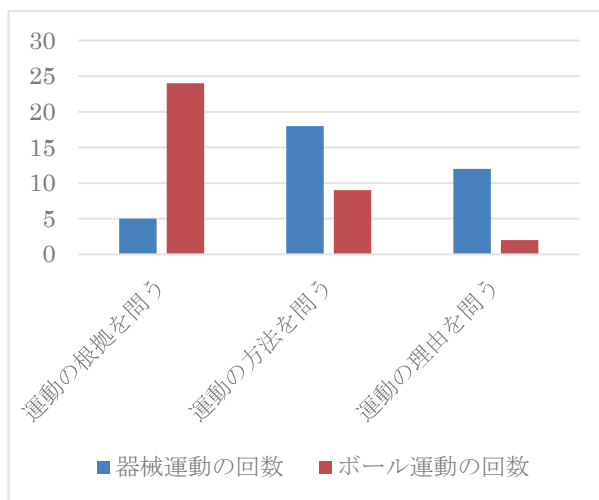
器械運動とボール運動の比較 (表)



器械運動とボール運動の比較 (グラフ)

この中から、大きく差が見られる2項目を比較する。

	器械運動の回数	ボール運動の回数
運動の根拠を問う	5	24
運動の方法を問う	18	9
運動の理由を問う	12	2



「運動の根拠を問う」では、約5倍となっている。これは、ボール運動における「移動する(ボールを持たない動き)」動きに対しての問い返しが多かったことが理由として上げられる。

このことは、運動そのものをできるようにすることが課題ではなく、周辺の技能を用いながら、「移動する」動きのプロセスにおける思考を問うことに起因する。

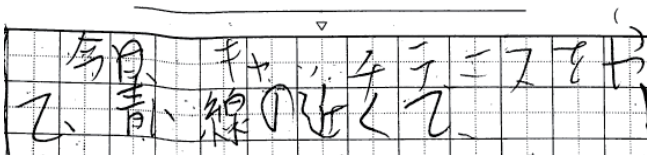
他方、「運動の方法を問う」では、約2倍となっている。これは、運動そのものができるようになるために選択した運動自体を問い返すことにつながってくる。動きそのものを問う場合、コツやカンのような動感を、仲間と共有できるようなポイント化していくために、運動の方法を問うことが有効となる。

また、児童の動きを観察し、運動の理由を問うことにより、無意識に表出された運動を、瞬時に分析し、運動の意図を考えさせる。器械運動のような、自己の運動をメタ認知的に捉えさせる際に、頭の中で映像を再現したり、ICT機器で撮影した映像をみたりしながら問うことにより、直観的に感じ取り、瞬時に運動として表出していくことができるようになると思われる。

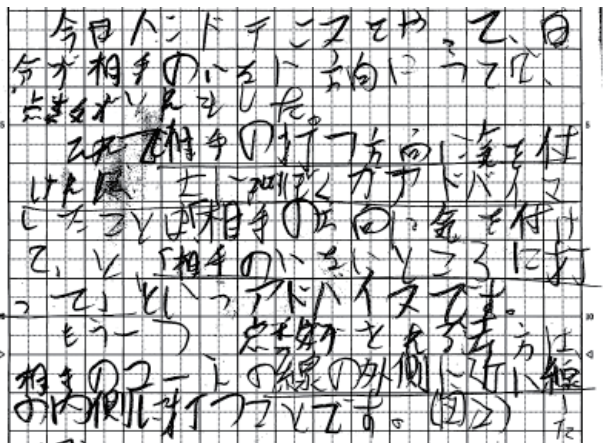
(9) 児童の変容

仲間との関わりに関連さを抱える児童の変容(体育ノートの記述の量と質)

2時間目



6時間目



単元前半では、ルールの理解について難しさがあった。繰り返しゲームに取り組むことより、ゆっくりではあるが、理解し、プレイの幅が広がってきた。そのつどナイスプレイに対して、教師が問い返すことにより、移動のスピードが上がったり、力強いスマッシュを打ったりと変わっていった。それを受けて、6時間目では、自分だけではなく、仲間との関わりをもとようとしている。このアドバイスは、教師がフィードバックを繰り返してきたことに似ており、その効果を伺うことができる。

この児童にとって、仲間との関わりは、感性の働きが支えていることであり、運動を媒介としながら、主体的に運動に取り組む態度を高めることができたこととらえることができる。

4. まとめ

今次研究では、つぎのことが明らかになった。

- ボール運動では、教師が児童の動きを観察する際に、瞬間的な動作ではなく、移動に至るプロセス的な動作を観るため、フィードバックの回数が減少する。
- ボール運動では、プロセス的な動作を獲得させるため、その運動の根拠を問うことが多く出現することが伺える。(どうしてその場所に動いたのか)
- 器械運動との比較では、運動領域における個人領域と集団領域の違いから、フィードバック言語の項目でも差が見られる。それは、運動そのものが課題となる領域と、運動をしながら移動することが課題となる領域とで違いが見られる。その際、前者では、方法や理由を、後者では根拠を問うことが多くなることが伺える。
- これらから、教師は、運動の領域や課題に応じて、子供への関わり方に違いが見られる。そのため、教師は、意図的に子供の状態を見取り、フィードバックしていくことが効果的である。

謝辞

本研究を行うにあたり、多くの方々にご支援いただきました。本研究のために調査にご協力いただいたみなさまに心から感謝いたします。ありがとうございました。

また、授業を通して、いつも熱心に取り組んでいた子供達に、心から感謝いたします。

引用文献

- 文部科学省小学校学習指導要領解説(平成29年告示) 体育科編, 東洋館出版社
- 岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集 第7巻・第8巻
- 岩手大学教育学部附属小学校研究紀要第33集
- 深見英一郎他(2007) 体育授業における教師の効果的なフィードバック行動に関する検討